

ふるさとの森づくりにかかわる人々

地域の実情に応じて地域住民等の理解と協力を得つつ、県、市や林業関係者と一体となって関連施策を講じることにより、適切な森林整備を推進します。

森林を所有する者（個人、生産森林組合、共有林管理団体等）

市民（森林所有の有無にかかわらず）

丹波篠山市森林組合

林業事業者（素材生産事業者、自伐型林業家、建築業者、NPO法人、機構等）

研究者・専門家

行政（市・県）

情報発信と取り組みの共有化

ふるさとの森づくり ネットワーク会議



発行日/令和7年3月
発行/丹波篠山市 農都創造部 森づくり課
〒669-2397 兵庫県丹波篠山市北新町41
TEL (079) 552-1111(代) FAX (079) 552-2090
URL <https://www.city.tambasasayama.lg.jp/>



森づくり構想は左記のQRコードよりダウンロードできます。

丹波篠山市ふるさとの森づくり構想 改訂 概要版

「篠山市ふるさとの森づくり構想」策定の背景と構想の位置づけ

丹波篠山市の魅力は、多紀連山を中心とした山並みと、美しい川、そしてのどかな田園風景などと共に構成される自然景観です。森林がその自然景観を形づくり、多様な機能を持ち、再び財産として注目されるように、適正に管理し、それにより生み出される森の恵みをまちづくりの資源として生かせるように、本市では、平成27（2015）年4月1日に「篠山市ふるさとの森づくり条例」（当時）を施行し、同条例第10条に基づき、「篠山市ふるさとの森づくり構想」を策定しました（市名変更にともない「丹波篠山市ふるさとの森づくり構想」に名称変更）。

丹波篠山市ふるさとの森づくり構想は、「人工林管理（間伐等）を推進しつつそのものを最終目的とするのではなく、市民が森林を資源として利用する生活を取り戻すこと、そのための人材育成、森林に関わる文化や仕組みの再構築、そして、人と森とそこに暮らす動物とが安定した持続可能な関係を築けることが重要」とし、

基本方針を

『みんなが森と多様な関わりをもち、木を使うことで、森林資源を循環させ、健康な森林と共に暮らす未来を目指します。』

として、「温故知森」の合言葉の下、木をはじめとする森林資源を効果的に利用する仕組みづくりを新たな視点で構築し、かつてのような「森の恵みを大事にするまち」を目指してきました。

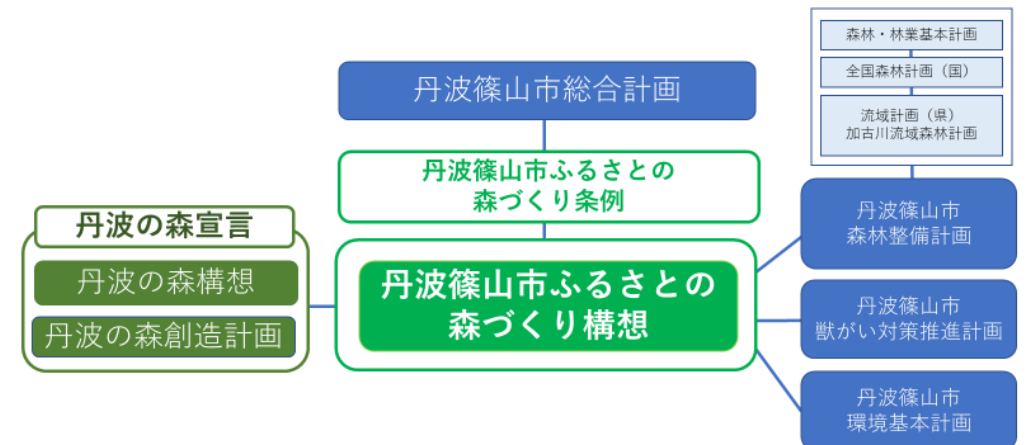
そして、3つの方針、

1. 木育の推進～森に目を向ける人たち、森に入る人たちを育てるまち～
2. 篠山の木をつかう～いろんな場所や場面で木が使われているまち～
3. 森の恵みの回復～森からいろいろな恵みをうけるまち～

のもと、18のアクションプロジェクトが設定され、取り組みが進められました。そして、「篠山市ふるさとの森づくり構想」の実現に向けて、県や林業関係者等で構成される「ふるさとの森づくり連携ネットワーク会議」を設置し、事業の進捗管理等について委員の皆様から助言や提言を受けながら、その実現に向けて取り組んできました。

当該構想は20年としており、策定から10年を経過しようとするところから、半期を振り返り、基本方針は踏襲しつつ、本構想が市民の皆さんにわかりやすく今一度お示しすることとしました。

丹波篠山市ふるさとの森づくり構想の位置づけ



基本方針

みんなが森と多様な関わりをもち、木を使うことで、森林資源を循環させ、健康な森林※と共に暮らす未来を目指します。



方針1 「木とふれあい、木に学び、木と生きる（木育）」の推進
～森に目を向ける人たち、森に入る人たちを育てるまち～

「木育」とは、市民だけでなく関係人口と呼ばれる人びとも、また、森との関わりかたや世代を問わず、すべての人を対象にして「森への思いや森に関する知識」を育むこと。ひとりひとりが「温故知森」を実践することで、森に関心を持ち、森で遊び、森について考え行動する人、仕事として関わる人を増やし、森林の価値や存在の意味への理解を深め、森に入る人たちが増える社会を目指します。

方針2 森の恵みの回復 ～森からいろいろな恵みをうけるまち～

森林の恵みは、わたしたちの生活を豊かにしてきました。そして、すべての生き物が生きていくための大切な水を育み、また二酸化炭素を吸収し酸素を放出します。また、土砂が流失するのを防ぎ、さらに山の自然を暮らしとして楽しむ森「文化林」としての価値もあります。「温故知森」を合言葉に、私たちは、丹波篠山の豊かな生物多様性、豊かな暮らしを支えてきた森林の恵みを失うことのないように努めます。

方針3 丹波篠山の木をつかう ～いろんな場所や場面で木が使われているまち～

丹波篠山市の森林資源は、戦後植林されたスギ、ヒノキの人工林のほか、薪炭として利用されてきた広葉樹林など豊かな森林資源があります。これらの森林資源を暮らしの中に取り入れていくために、木を伐り出す人（川上）、加工して使えるようにする人（川中）、そして使う人（川下）が、うまくつながり、森や木に関わる人たちが活躍して、資源を循環的に利用し、木の恩恵を受け続けられるよう、様々な場所や場面で木が使われている社会を目指します。

※健康な森林・・・森林の多面的機能が十分に発揮されている森

私たちが目指す「丹波篠山市ふるさとの森」

1. 身近な存在の森

かつて、人の生活と密接な関りのあった里山は、現在では、ほとんど人が入ることなくなり、遠くの存在となっています。そこで、もう一度、里山を見直し、地域住民にとって、心癒される場であったり、子供達が自然の中で遊び学べる場であったりする、文化的な身近な存在の森を目指します。また、人が、森に入ることによって獣害を緩和することも期待できます。この様な森にするためには、森林所有者が庭や農地と同じ感覚で管理を望みたいところですが、個人で管理できなければ、地域等で管理できる仕組みが必要です。

2. 多面的機能を発揮する森

森には、植物はもとより人間を含む多くの生き物の命を育む働きがあります。その働きの中には、水を貯える（水源かん養）機能、山地災害を緩和する土砂流出防備機能、地球温暖化防止につながる二酸化炭素吸収する機能、多くの生き物が生息できる生物の多様性を高める機能、人の心を癒してくれる保健休養機能、人が利用する木材を生産する木材生産機能など、多面的な機能があります。このような森林の多面的機能を発揮するためには、適正な森林管理と多様な森林活用についての意識を持てる人材の育成が求められます。

3. 使える森、価値がある森

里山の森林資源は、建築、木工用材をはじめ、薪炭材としてのエネルギー源、キノコ栽培の原木、サカキをはじめとする花木、木の実、マツタケ等の天然キノコ、山菜など、有用な資源が豊富に存在します。これらの価値をあらためて知ることによって、資源の利用が進み、森全体の価値が人々に認識されて、森に人が入るきっかけとなります。その価値を高めるには、作業道などの基盤整備なども必要です。

このような、3つの目指す姿を実現することで、丹波篠山市の里山を、「ふるさとの森」として価値あるものにしていきます。



実現に向けたアクションプロジェクト

